

教会への警告：現代の教義上の相違に見られるテアテラの反響

導入

ヨハネの黙示録の中で、イエスは小アジアの七つの教会に語りかけ、称賛、叱責、そして悔い改めの呼びかけを行っています。中でも、テアテラの教会へのメッセージ（黙示録 2:18-29）は、モルモン教（モルモン書を含む）と新約聖書との間の教義上の矛盾をまとめた本書の導入として特にふさわしいものです。イエスはご自身を「燃える炎のような目と、磨かれた真鍮のような足を持つ神の子」と表現し、テアテラの教会の行い、愛、奉仕、信仰、そして忍耐を称賛し、「彼らの最後の行いは最初の行いよりも優れている」と述べています。しかしながら、イエスは「預言者と自称する女イゼベルが、わたしの僕たちを誘惑して淫行をさせ、偶像に捧げられた物を食べさせている」ことを容認しているとして、彼らを厳しく叱責しています。この偽預言者は信者たちを教義的、道徳的な妥協へと導き、モルモン教が新約聖書の教義から逸脱した教えにもかかわらずジョセフ・スミスを真の預言者として受け入れている状況と類似点を指摘している。

イエスは、悔い改めなければ彼女とその弟子たちに厳しい裁きが下ると警告し、「わたしが来るまで、あなたがたが持っているものをしっかりと守りなさい」と強調し、勝利する者には諸国を支配する権威や明けの明星を含む報いを与えると約束した。テアテラが真理の核心を歪める偽預言者の影響を拒絶するよう求められたように、この文書は新約聖書の十分さを超えて追加の啓示や預言者を受け入れることから生じる矛盾を検証し、イエスの「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい」という勧告に沿って、そのような誘惑に対する識別力を促している。

モルモン教の視点はバランス感覚に優れていることで知られ、これらの事柄を失われた真理の回復と捉えることが多いが、焦点は直接的な相違点に当てられている。考古学的主張は簡単に触れられているものの、新約聖書の教義上の直接的な矛盾というよりも歴史的検証に関わるものであるため、重要視されていない。

モルモン教／モルモン書の教義と新約聖書の教義との間の矛盾点のまとめ

1. 神の本質（一神教 vs. 多神教）

新約聖書の教義：新約聖書は厳格な一神教、すなわち唯一の神を肯定しています。例えば、テモテへの手紙第一 2 章 5 節とヨハネによる福音書 1 章 1 節では、ギリシャ語原文は「唯一の神」を強調しており、複数の神や神性への段階的な昇格を一切認めていません。

モルモン教の教義との対比：モルモン教は複数の神々の存在を教えており、父なる神は肉体を持つ高貴な人間であり、イエスは文字通りの長子の霊の子（すべての人間、さらにはルシファーも霊の兄弟姉妹）であり、忠実な人間は神になる可能性（昇栄）があると説いています。

2. 救い（恵みによる信仰のみによる救い vs. 行いによる恵みによる救い）

新約聖書の教義：救いは信仰を通して与えられる恵みの賜物として提示され、人間の行いは明確に除外されている（エフェソの信徒への手紙 2 章 8-9 節、ローマの信徒への手紙 11 章 6 節）。

モルモン教の教義との違い：モルモン教は救い（普遍的な復活は普遍的であるが、より高い王国への昇栄には信仰に加え、バプテスマ、神殿の儀式、什分の一の献金、律法への従順といった行いが必要である）を教えている。モルモン書は、恵みは「わたしたちがなし得るすべてのことの後」に与えられると述べている（2 ニーフアイ 25:23）。

3. 結婚と死後の世界（復活後の結婚は存在しないのか、それとも永遠の結婚が存在するのか）

新約聖書の教義：結婚は地上のものであり、復活の時代には存続しない（マタイによる福音書 22 章 30 節）。

モルモン教の教義との違い：モルモン教は、神殿での結び固めの儀式を通して永遠の結婚を重視し、ふさわしい夫婦は永遠に結婚した状態を保つ。

4. 神権の権威（信者の普遍的な神権 vs. 階層的な排他的な神権）

新約聖書の教義：すべての信者は、別途聖職者階級を設ける必要なく、王なる祭司職を形成する（ペテロの手紙第一 2:9）。

モルモン教の教義との違い：モルモン教では、ふさわしい男性のみが保持する、アロン神権とメルキゼデク神権という排他的な神権制度が求められる。

5. 聖書の十分性と追加の福音書は不要（聖書は信者を完成させる vs. 追加の啓示の必要性）

新約聖書の教義：聖書は教えと信者の備えに十分である（テモテ第二 3:16-17、ガラテヤ 1:8）。

モルモン教の教義との違い：モルモン教は開かれた正典体系を採用しており、モルモン書は「イエス・キリストのもう一つの証」であり、啓示は継続的に与えられている。

6. キリストにおける人種的または民族的な区別（平等か、呪いや制限か）

新約聖書の教義：キリストにあっては、民族的な区別は消滅する（ガラテヤ 3:28）。

モルモン教の教義との対比：モルモン書は肌の色が黒いことを神の呪いと結びつけており、末日聖徒イエス・キリスト教会は 1978 年までアフリカ系の人々に神権を与えることを制限していた。

7. イエスの生誕地（エルサレム対ベツレヘム）

新約聖書の教義：イエスはベツレヘムで生まれた（マタイによる福音書 2 章 1 節）。

モルモン書との対比：アルマ書 7 章 10 節では、イエスは「わたしたちの先祖の地であるエルサレムで、マリアから生まれる」と預言されています。

8. 磔刑時の暗闇の持続時間（3 日間 vs. 3 時間）

新約聖書の教義：十字架刑の間、三時間の間、地上は暗闇に覆われた（マタイによる福音書 27 章 45 節）。

モルモン書との対比：ヒラマン書 14 章 20 節、27 節と 3 ニーフアイ書 8 章 3 節、23 節では、3 日間の暗闇について述べられています。

9. 大祭司制度の構造（複数の大祭司が同時に存在する場合と、一度に一人の大祭司が存在する場合）

新約聖書の教義：大祭司は一度に一人しか務めることができず、イエスが究極の唯一の大祭司である（ヘブライ人への手紙 8:6-7、マタイによる福音書 26:3）。

モルモン書との対比：モーサヤ書 11 章 11 節、アルマ書 13 章 9-10 節、ヒラマン書 3 章 25 節では、複数の大祭司が同時に奉仕していたことが述べられています。

10. 新約聖書の記述が書かれる以前の箇所を引用すること（時代錯誤的な引用と歴史的順序）

新約聖書の教義：新約聖書のテキストは復活後に書かれた（例：コリントの信徒への手紙一 12:4-11）。

モルモン書との比較：モロナイ書 10 章 8-17 節とモロナイ書 7 章 48 節は、新約聖書の箇所を時代錯誤的に再現している。

11. 主の祈りの頌栄（後世の追加の有無と原典における欠落）

新約聖書の教義：主の祈りは、最も初期の写本では頌栄なしで終わっている（マタイによる福音書 6 章 13 節）。

モルモン書との比較：3 ニューファイ 13 章 13 節には、欽定訳聖書の頌栄が完全に含まれている。

12. 新約聖書の注釈を旧約聖書の預言に誤って帰属させること（混同された引用 vs. 明確な出典）

新約聖書の教義：使徒行伝 3 章 22～26 節は申命記を言い換えているが、独自の要素も加えている。

モルモン書との比較：3 ニューファイ 20 章 23-26 節では、ペテロによる新約聖書への追加が本来の預言として提示されている。

13. 教会またはキリストの体の存在（復活前の設立 vs. 復活後の形成）

新約聖書の教義：キリストの体としての教会は、イエスの復活後に形成される（エフェソの信徒への手紙 1:22-23）。

モルモン書との対比：モーサヤ書 18 章 17 節とモーサヤ書 15 章 5 節では、イエスの誕生以前に「神の教会」と「キリストの体」について言及している。

14. 魂の死前存在（前世なし vs. 天国における霊の子）

新約聖書の教義：新約聖書は前世の存在を教えていない（コリント人への手紙第一 15:46、ヨハネによる福音書 1:3）。

モルモン書との比較：アルマ書 13 章 3-5 節と末日聖徒イエス・キリスト教会の神学は、前世における霊の存在を教えている。

15. 永遠の進歩と昇華（不変の神 vs. 神となる人間）

新約聖書の教義：神とキリストは不変である（ヘブライ人への手紙 13 章 8 節、ローマ人への手紙 8 章 17 節は相続について述べており、神格化について述べているわけではない）。

モルモン書との対比：3 ニーフアイ 28:10、教義と聖約 132:19-20 は、神のような地位への進歩を教えている。

16. 死者のための洗礼（個人洗礼と代理洗礼）

新約聖書の教義：洗礼は生きている者のためのものであり、死後には裁きがある（ヘブライ人への手紙 9 章 27 節）。

モルモン書との比較：教義と聖約 128 章では、死者のための代理洗礼が認められている。

17. 秘密結社と誓約（誓約禁止 vs. 神聖な契約）

新約聖書の教義：誓いは禁じられている（マタイによる福音書 5:34-37）。

モルモン書との対比：エテル書 8 章 14-19 節、ヒラマン書 6 章 22-26 節、および末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿儀式には、神聖な聖約が伴う。

18. 複数の天国または栄光の段階（二元的な死後の世界 vs. 三国時代）

新約聖書の教義：死後の世界は二者択一であり、永遠の命か罰かのどちらかである（マタイによる福音書 25 章 46 節）。

モルモン書の対比：教義と聖約 76 章では、栄光の 3 つの段階が紹介されています。

19. キリストの復活後の宣教活動の場所（ユダヤ地方のみか、アメリカ大陸への訪問か）

新約聖書の教義：イエスの復活後の出現は限られている（使徒行伝 1:3）。

モルモン書との対比：3 ニーフアイ 11-26 章では、イエスがアメリカ大陸を訪れたことが記述されている。

20. 一夫多妻制（一夫一妻制の基準 vs. 条件付き容認）

新約聖書の教義：指導者は一夫一婦制であるべきである（テモテへの手紙第一 3:2）。

モルモン書との対比：ヤコブ 2 章 24-27 節は一夫多妻制を非難しているが、神が命じる場合は認めている。

21. 考古学のおよび歴史的主張（裏付けのある遺跡と、根拠のない文明）

新約聖書の教義：新約聖書の舞台設定は歴史的証拠と一致する。

モルモン書との対比：考古学的裏付けのないコロンブス以前のアメリカ文明について記述している。

モルモン教の矛盾の要約

いいえ。	トピック	新約聖書の教義	モルモン教／モルモン書の教義	
			ン書の教義	重要な矛盾
1	神の本質	厳格な一神教。唯一の神。	神々の多元性、高貴な人間としての神	一神教対多神教
2	救済	恵みによって、信仰のみによって	行いの後に恵みが与えられ、努力によって高められる。	信仰による救い vs. 行いによる救い
3	結婚と死後の世界	復活には結婚はない	永遠の結婚と子孫繁栄	現世の結婚 vs. 永遠の結婚
4	神権の権能	信徒の普遍的祭司職	アロン神権とメルキゼデク神権の独占的	普遍的聖職制度と階層的聖職制度
5	聖書の十分性	聖書は信者を完成させる	さらなる情報開示の必要性	閉鎖型大砲 vs. 開放型大砲
6	人種／民族による区別	キリストにあっては、すべての人は平等である。	人種に基づく呪い／制限	平等対差別
7	イエスの生誕地	ベツレヘム	エルサレム（祖先の地）	特定の場所と一般的な場所
8	磔刑の暗闇	3 時間	3 日間	期間の差
9	大祭司職の構造	一度に一人の大祭司	複数の大祭司が同時に	単数形と複数形の「聖職」

いいえ。	トピック	モルモン教／モルモン書の教義		
		新約聖書の教義	新書の教義	重要な矛盾
10	時代錯誤的な新約聖書の引用	新約聖書は復活後に書かれた	新約聖書の箇所を引用している新約聖書以前の文献	歴史的順序対時代錯誤
11	主の祈りの頌栄	オリジナルには存在しない	部品表に含まれています	テキストの異体字の包含
12	新約聖書の解説を旧約聖書の預言として捉える	異なる歴史資料	BOM における複合見積もり	誤帰属
13	教会の存在	復活後の形成	復活前の設立	年代の矛盾
14	前世の存在	魂の先在は存在しない	天国の霊の子どもたち	自然秩序対精神秩序
15	永遠の進歩／高揚	不変の神	人間が神になる	神の本質 vs. 人間の進歩
16	死者のための洗礼	個人洗礼	死者のための代理条例	終焉と死後の儀式
17	秘密の組み合わせ／誓約	誓いを立ててはいけない	秘密を守る神聖な契約	透明性対秘密主義
18	死後の世界の構造	バイナリーの死後の世界	栄光の三段階	二元的な死後の世界と段階的な死後の世界
19	キリストの宣教活動の場所	ユダヤ地方に限定	アメリカ大陸への訪問	地域的露出と世界的露出
20	一夫多妻	一夫一婦制の基準	条件付き手当	一夫一婦制 vs. 一夫多妻制
21	考古学的主張	検証済みの設定	根拠のない BOM 文 明	サポート対象履歴とサポート対象外履歴

モルモン教の立場からすると、彼らの教義は、伝承の誤りによって原典から失われた「明白で貴重な」真理を復元することによって新約聖書と一致する。なぜなら、彼らは聖書は正しく翻訳されている限りにおいてのみ信頼できると信じているからである。しかし、新約聖書のギリシャ語には、そのよう

な不完全さや加筆の必要性は示されていない。これらの相違は、新約聖書の原語のみに基づく根本的な相違を浮き彫りにしている。包括的な見解を得るには、全文を参照することをお勧めする。なぜなら、モルモン教徒は、これらの明らかな矛盾にもかかわらず、モルモン書は新約聖書を補完するものだとして主張しているからである。